

大災害の中で

本屋禎子

2011年3月11日に発生した地震、津波とその後の原発事故のなかで考えた。

2006年7月30日に行われた五星会の会場だった宮城県白石市の能楽堂「碧水園」の天井も崩落した。仙台市能楽振興協会（宮城県の能楽愛好家素人五流の集まり）でこれまで年四回持っていた舞囃子・仕舞・謡・狂言の会の複数の会場も地震による被害のため復旧の見込みはたっていない。この先十年文化予算はまず学校建設が先とのことである。地震と津波の被害を受け全てを流され謡・仕舞のお稽古どころではないという話も聞く。

M9の地震当日は仙台の自宅でお稽古中だった。電気、ガス、水道、電話などのライフラインが絶たれた中で六日を自宅で過ごし、福島原発事故発生後、原子力研究者の家族が山形に避難したと聞き、夜中雪の中を車で仙台を脱出した。

大阪に着き大阪女子短期大学グリーンセミナー謡仕舞講座の人達や同僚からの支援物資を頂き、仙台に向かおうとレンタカーを探したが、放射能が怖いと何カ所かで断られた。五、六カ所のホームセンターでは電池やビニールのレインコートが売り切れで大阪の人達も放射能汚染に備えているのが分かった。

震災から九日目に大阪で「地震記念謡会」を持って貰い「杜若」の謡で声と心を合わせしみじみと生かされている幸せを感じた。その会に用意された千股くにごさんの句を紹介したい。

香り立つめぐる命や春の風

この句から私は被災地で生活する人へガソリンを運ぶ勇気を後押しされた。何があろうとここから出発するしかないのだ。大災害の中、多くの負を抱える中、人々の温かさや善意、気遣いなど多くのものを得た。これが文化の源だ。

3/11以降世界は変わってしまった。生存のために費やす努力が以前の何倍にもなった。その中で生きるにあたって何が必要かを考えながら進んでいる。